



102号
2005/4/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」

東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/>

Eメール:wanli@m2.ocv.ne.jp

ホームページは毎月5日頃までに更新を務めています。



わーい！ 平気だもん ラオス

安井清子氏撮影

「わんりい」102号の主な目次

中国紹介(18福建省・土楼3).....	2
「康定情歌の旅」②.....	4
東チベット周遊PHOTO TREK(写真撮影の旅)③.....	6
松本杏花さんの俳句.....	7
ネパールスタディツアー⑦「花のようなシータ」.....	8
ピースポート105日間の旅Ⅱ.....	10
あさおサークル祭り2005の催し紹介.....	11
今、タイとラオスでⅢ 「子どもと絵本の集まる場所を作る(図書館を建てる)」.....	12
ラオス・山の民モンの子どもの刺繍絵本展.....	13
何媛媛来信⑫「二月二日、龍台頭」.....	14
中国を読む⑫「対談 中国を考える」.....	14
【活動報告】「ワンタン交流会」.....	15
わんりいおたより会員継続のお願いとお誘い.....	15
スマトラ沖地震復興支援報告.....	16
「わんりい」掲示板.....	16

♪♪ 笑顔が美しくなる ♪♪

「中国語で歌おう会」 会員募集中!

明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう!



4月の講座 4月15日(金)

19:00 ~ 20:45

麻生市民館・視聴覚室(新百合ヶ丘駅北口3分)

●3月の練習曲「媽媽的吻」(お母さんのキス)

指導: 趙鳳英さん(中国四川省出身歌手)

体験参加歓迎! ご自由にご参加ください!!

体験参加費: 1500円

ご参加される方は録音機をお持ちください。

問合せは、「わんりい」事務局へどうぞ

尚、5月21日(土)10:30~12:00

無料体験講座「いつでも夢を!」(あさおサークル祭り参加)詳細は16ページ掲示板をご覧ください。

【中国紹介 《18》】 〈福建省・土楼4〉

轡田 美弥子

永定地区で「土楼王子」といえば、湖坑客家土楼民俗村にある振成楼です。ここには振成楼をはじめ、福裕楼、奎聚楼の国家級重点保護文物としての土楼を含む40余りの土楼があります。ここ数年で観光地としての設備をととのえており、土楼の周囲が土から石畳になったり、各土楼の紹介が入口に掲示されたり、点在する土楼を電動カート(有料)で移動できるようになったりと便利になりました。それでも、これらの楼にはいまだに居住者がいます。住んでいるままに家が観光地となり、そこに不特定多数の人々が訪問してきます。日本とは違って驚きました。文化財として保護されている家はありますが、多くの人が住んでいるままというのはなかなか難しい環境ではないでしょうか。飛驒の白川郷は世界遺産ですが、やはりふらっと外国人が訪ねてきても見せてくれるのでしょうか。

土楼民俗村の入口で入場料を払い、案内掲示板を見ながらしばらく歩いて行くと最初にあらわれるのが天后宮です。天后は福建・広東の海の守り神でもあり、子授け神でもある媽祖(女神)を祀った建物です。福建省と台湾では各家庭の居間にも小さな祭壇をもうけて祀ってあるのが見られます。永定のような山奥でも天后宮がありました。華南地方らしく、屋根の端は上に反り上がっています。内部は赤を中心として、媽祖像があり、赤い線香が常に灯されています。日本の神社のような印象です。この建物は土楼ではないので、どこにもある華南地方の建物のつくりになっています。

その先にあるのが慶成楼という方楼です。ここはこの観光地における土楼博物館になっています。1階の祖堂にあたる



慶成楼：土楼民俗文化村の中にある土楼博物館。4階建ての方楼でその一部を開放して展示している。1階は祖堂にあたる部分。

ところでは揚琴の練習をしている人がいました。楼内の部屋の半分くらいでしょうか、それらは博物館として農作業に使う道具、服飾、風俗、歴史、出身の著名人などが展示されています。部屋が小さいので、各部屋が1つのテーマとなっていることが多いようです。床が板敷きなので、歩くと相当な音が響きわたります。上階の足音がよく聞こえたので、夜同じ状況になるとおそらく眠れないのではないかと思います。展示物や内容、外観は南靖にある



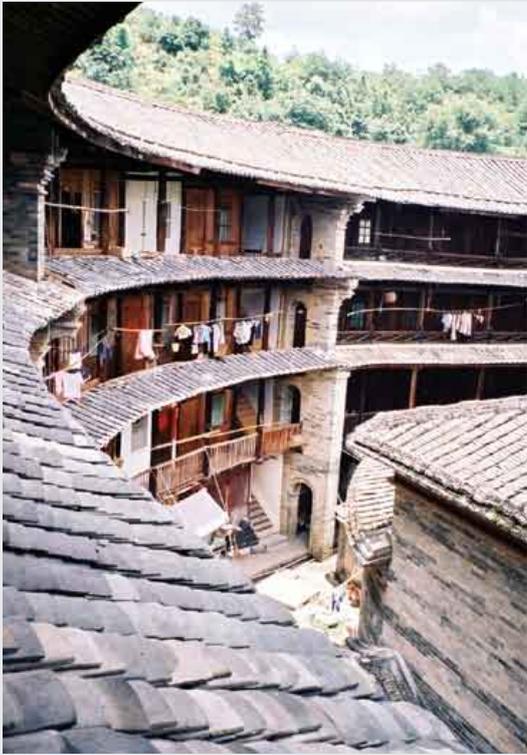
天后宮：土楼民俗文化村で最初に出会う建物の内部。赤を中心にして海の守り神などをまつっている。日本でいうところの神社のよう。



振成楼祖堂と内円。祖堂の外観は洋風になっている。

土楼博物館とほぼ同じです。湖坑民俗村で、博物館としての静的陳列物と現実の人々の生活という動的展示を同時に見られるという意味ではこちらのほうが有効かもしれません。

湖坑で目玉にあたる振成楼は、この博物土楼のすぐそばにあります。周囲は少し大きめの玉砂利ならぬ石砂利でおおわれています。土楼があまりに大きくてきれいなので、上ばかり見ながら歩いたり写真のスポットをさがすことに夢中になると足をくじくかもしれません。形が整っているので、見栄えもよく写真を撮るにはよい場所でもあります。この楼は1912年から作られ、5年かけて完成しました。敷地は5000平方メートル、外円の高さは16メートルです。煙刀でうけた林一族の富裕の集大成として作られたそうで、外円は4階建てで184部屋あります。承啓楼のように内部にも複数円楼があるというわけではなく、内円は1つで、そのまた内側に立派な祖堂があります。この祖堂の上部や住居部の手すりは、石できておりどうみても西洋風です。飾りなども中国風ではなく一見洋館のようにも思えます。けれども祖堂には漢字で書かれた額や祭壇らしきものがあり、やはり土楼としての調度物はととのっています。外側(外壁)などは土楼本来の伝統のつくりですが、内部の柱や廊下などは西洋風でこの楼が新しいことを感じさせます。内円は2階建てで部屋も32あります。この振成楼も現在は居住する人が減っているようで、一部は



振成楼内部より、外円の様子。



振成楼の外観。周囲の道も観光地化で整備されている。



振成楼4階より、祖堂と内円の様子。形がよい。

宿泊所として訪問者に貸しているようです。立派な井戸が2つあり、円外には客間楼やトイレをもつ建物が付属しています。建物の造りを承啓楼と比較すると、新しいこともあり振成楼のほうがきれいです。壁には防火壁があり、火事になっても全体に火がまわらないように工夫されています。円楼は柱にかかる力が均等であるため地震にも強く、どの部屋も同面積に近いので居住者の身分の差別が部屋によってわかりにくいなど、方楼よりも工夫がなされているところが円楼が方楼より進化したとされる条件です。振成楼は、八卦の概念が取り入れられており全体が八つに区分されており、楼内2箇所ある井戸も陰陽を表しているそうです。やはり中国の建物には必要な条件でしょうか。

この楼の1階であいている、つまり門が閉じられていない部屋は、売店になっています。各人が個別で商店を出しているようで、売っているものはほとんど同じものです。ある店で値段を聞いていたら、別の人が自分の店で買ってほしいと言ってきました。それで各部屋がブースになっていることがわかりました。この地方の特産品は、野菜の干物や漢方薬などのようです。薬材として草木を売っているのですが、効果は書いてあっても使い方がよくわからないので買いにくいものです。たまたま通りかかった店で、お茶を試飲させてくれました。といっても色は真っ赤で味は花系です。ものを見せてもらったら、大きめの真っ赤な花でした。何もいれなくても少し甘めで酸味があり、ハイビスカスティーのような味です。気に入ったので、買いました。このあたりで取れるのか、他の店でも結構売っています。店によって値段や量が違うので、いくつかの店で買って見ましたが、味はだいたい同じでした。商売熱心な女性から、野菜の乾燥したものを勧められました。鍋

やスープにいれるとよいということですが、こちらはまだ味見していません。薬材もおまけにくれたのですが、スープにいれても味はなく枯れ木のように逆に食べにくかったので、これは口に合いませんでした。他の土産物は、ミニ土楼や絵はがき、写真集などです。漢方や薬材に詳しくないので、買うとしても花のハーブティーか、絵はがきなどになります。

この振成楼も4階建てなので、上から見下ろすと防火壁を含めてきれいな形をした祖堂などがよく見えます。階段も手すりがあり、他の土楼よりはつくりが現代的で危険も少ないと思われる。承啓楼よりも歴史が新しいし、石できている欄干などは頑丈でそれだけでも余計にすばらしく感じるものです。住んでいる住人も少なく、破壊されている部分も少ないので観光場所としてはこちらのほうが適しているかもしれません。宿としても使えますし、現地で何人かの日本人にも出会いましたが二日間宿泊すると聞きました。食事もできるそうで、寒くなければ1泊くらいならよいかもしれません。土楼内を観光していると、居住者であった林一族の人が旅行社を兼ねているようで、宿泊しないか、食事をしていかないか、と誘ってきました。楼内で顔を合わせた林さんが何人かいるのですが、やはり似通っている印象を受けました。当然といえば当然かもしれませんが、楼を守る子孫としては観光客を相手に商売するのが建物を守るよい手段であるのでしょう。石材は、遠く上海あたりから船で運ばれてきたとか。金持ちになった林一族の屋敷としての意味もあるのでしょうか。祖堂のすばらしさは実際に行ってみるとよくわかります。(続)

■国家級風景名勝区「木格措」

明けて2005年1月1日。この日は「木格措」という、康定から北へ26kmにある景観地を訪ねた（「措」はチベット語で「みずうみ」、ただしもともとチベット文字には漢字は無いので、同じ発音の字を漢人が当てた）。「国家級風景名勝区」とかで、入園は有料で35元のところ冬季割引となり28元。入口のゲート小屋から出てきた青年スタッフが我々のバスをのぞき込んで人員を数えた。

バスがゲートから先に進むと、砂利道の林道はいつしか圧雪路面になった。まわりの林床も薄い雪で覆われるようになる。道幅は狭く、ヘアピンカーブ、急勾配が続くので、スリップ、転落の心配を運転手に変わって案じる場面が続いた。あたりは山岳的景観となって、サルオガセの垂れる黒い森が続く。北アルプス中腹の針葉樹林帯のような景色だが、見上げる山々は日本の山と比較すればやはり大陸的で、規模が大きい。黒光りする巨大な岩壁、青空をさえぎる褐色の鋭い稜線。

車道は美しい湖水のほとりで終わった。バスから降りる



ひっそりと静まりかえる木格措。背後の山がまぶしい



康定の街を二分して流れる折多川。

と、目前に広々とした谷間と湖、この湖が「木格措」だ。北アルプスの「白馬大池」を何倍か大きくしたような風景である。透明な青空にとけ込んだうす雲、その下に重い濃紺の水面が沈黙する。湖水の岸辺近くは凍結しているが、この高地（公称3780m）でも昼間の太陽熱で全面結氷はしないようだ。ここから、徒歩なり、馬を雇うなりして奥地へ行くことができるが（前日立ち寄った塔公草原へも続いている）、今は冬なので小道は凍って滑るし、厳寒季で行く人はいない。背後の高峰は、白雪をまぶしてモンブランのケーキのように鮮やかであった。春、夏ならば花々が咲き、木々の緑も鮮やかでさぞよいところであろうと思った。

とりあえずバスを降り、高みの途中まで歩くことにした。カラマツの林の中を続く道をゆっくりたどる。観光客は中国人がちらほらだ。ところどころに古い降雪のなごりが、凍結して油断ならない。ずーと先まで行ってみたかったが、見通しのよい丘まで行き、しばし佇んだのちそこからバスに戻った。帰りは下り坂、小道の氷結部はつるつるに滑り、神経を使う。若い中国女性が見事に足を取られて転び、中国人の若い男が転んで、持っていたデジカメをゆがめたのを観た。

きた道を康定へ戻る。途中の「二道橋温泉」に立ち寄って昼食。そのあと温泉プールにつかり、遊ぶ。プールなので水着を着用。脱衣場は楽屋のようなベニヤ張りの小部屋で、シャワーなどの設備はない。ロッカーは脱衣場にないので、衣類を抱えて廊下設置した男女共用のロッカーまで出向い入れる。

ロッカーの施錠法が面白い。小型の南京錠で施錠するのだが、まず受付で鍵と錠の対をもらう。鍵にはおさまりの輪ゴムが付いていて、遊泳中は、手首などに付けるようになっている。ところが鍵には番号などはどこにも付いていない。一方ロッカーの扉には番号が書いてある。仕掛けは、客は使いたい空いているロッカーを開け、もらった南京錠で施錠する。どのロッカーを使ってもよいが、番号は客が覚えるのだ。

プールの深いところは150cmもあり、沈みかけてあわてた。温度はぬるく暖まらない。2600mの高地なのですぐ息が切れた。地元の客で結構繁盛していた。

夕食はホテルの食堂でとった。相変わらず食欲が無く、いろいろ食べ物が出て、いろいろ食べたいのに、残念であった。

夕食の後は皆で、康定に住むウリさんのお姉さんの案内でチベット風の歌舞を供する店に行った。ドアボーイに案内されて入った暗い室内には、舞台を囲んで、テーブルが並ぶ。出し物は予想通り電気仕掛けで増幅された大音響が充満。招待してもらって嬉しかったが、大音響は苦手である。



跑馬山からの眺望



跑馬山索道とすり鉢の底のような康定の街

■水が豊富な康定

中国西部は、北京時間に支配され、冬は8時頃にならないと、明るくならない。早起きの私としてはこの傾向は面白くない。東京だと7時には明るくなるが、ここではまだ夜更けの暗さだ。それでも6時頃には寝飽きてしまい、着物を着て暗い街を散歩に。外では、早起きの人々がポチポチ活動をはじめた。谷間なのでずいぶん冷え込んでいるが、乾燥しているため、車の窓には霜は付かない。暗い街を歩き回っているうちに、いつしか明るくなった。

とある街角で、湧水を見つけた。水辺はものを洗えるように、石畳を敷き詰めてあり、設備は立派だがゴミが目につく。日本にも、街角に湧水のあるところが多いが、いずれも掃除が行き届き、町の誇りとしている場所になっているのに。ゴミがあっても平気なのは、自分たちのものという、自覚が生まれていないのだろう。「康定情歌」の歌詞にでてくる「跑馬山」の麓に“水井子”という水神様(?)を祭った建物があるくらいなので、康定は水には恵まれているようだ。

■^{パーマ}跑馬山登山

ホテルに戻り朝食の後、「跑馬山」に登る。登山口までバス

で5分。この山にはゴンドラも架かっているのだが、私は歩きたかったので、皆に同意を求め歩くことになった。跑馬山の標高は公称2900m、康定の街が約2600mなので約300mの程度の標高差である。道はよく踏まれていて迷うことはない。枝道もあるが、どれも山頂へ続いているらしい。ところどころ岩の露出した山道である。地元の老人や子供もちらほら目につく。参拝や健康目的で登るようだ。

ウリさんは40分が標準的な所要時間だといったが、ゆっくり歩いたので1時間少々かかった。植生は近くのほかの山と同様に貧弱で、小振りのマツのみが目立った。山頂近くになかなか立派な仏教寺院があり、日本各地にある山中の寺と雰囲気と同じようだ。跑馬山には、康定南无寺、康定安覚寺、康定金剛寺の3つの寺があることになっているが、それは帰国してから分かったので、そのときはどの寺が何寺かは注意を払わなかった。

山頂は平らで、一部広場があり、跑馬山公園という名の苑地になっている。山頂にあるのでちょうど日本の城址公園のようだった。旧暦の4月8日に「転山会」というお祭りをここで催す。チベット族の馬術、武芸、踊りなどでにぎわうそうだ。今は閑散期なので、あまり人出はない。小屋がけの小規模な土産物屋や、ウマやヤクに客を乗せて料金を取る数人のチベット人が目につく程度だ。日本の観光地と同じようにスピーカーで音楽を流していたが、“康定情歌”ではなかった。私も試しに、ウマとヤクに乗り(同時にではない)広場を一周、観光客を演じた。ヤクより馬

の方が、なめらかで乗りやすいと感じた。私が短足なのでアブリに両足がかからず、あせった。かっこよく乗るのは難しい。

山頂広場の一角に大きな白い仏塔があり、その土台に上がると雄大な眺めが得られる。康定の周りは褐色の4000m級の山々がすさまじく取り囲み、大陸奥地を感じる。頭だけ出している高い山々は雪を反射してテラテラと白く光り、こうごうしい。5000m以上の高山に違いない。

下山はゴンドラで降りることにした。2人乗りのゴンドラで赤い塗装に「跑馬山索道」の白字が入っている。赤は中国人の好きな色である。索道は2002年7月完成、全長720m。48基のゴンドラが付いて、総工費1500万元だそうだ。運賃は往復30元、片道が20元……片道だとかなり割高だ。乗り場で観察すると、窓ガラス付のカゴと、窓ガラスなしのカゴとが交互に回っている。窓付は景色を見るのにじゃまなので、ウリさん以外は窓なしが来るまで待つ。乗り込むと、すこぶる遅い。けれど、その分景色をゆっくり見られるので文句はない。見下ろせば昨日泊まったホテルや、買い物をした広場などがはっきり判る。目をこらし、すり鉢の底のような康定の街並みを心に焼き付けた。 (完)

(2004年10月5日～10月31日)

四川省や雲南省とチベットの境界を流れる金沙江を渡ると狭い範囲に険しい山々がひしめき合い、その間をめぐって深い谷間に四つの大河が流れている。即ち、メコン川、怒江、イワラジ川とツアンボ川及びその支流である。この地方は、その地形上から地球の皺とも言われ、そこに占める横断山脈と呼ばれる山域には6,000から7,000米の数多の未踏峰が存在する。



しい所らしい。到着すると、すぐに警察に行き登録しなければならないが、手抜きをして様子を見たが何も起こらなかった。

八一から、南に下って南迦巴瓦峰のBCを見に行くか、それとも八(巴)松措(聖なる湖)まで車をとばすかの選択があったが、後者が優先され、しぶしぶの運転手を叱咤激励してラサ方面に向かう。川蔵公路と別れ、湖方面に足を踏み入れると、カラフルな青屋根の民家が目立つ。これは政府が住民対策用に作った住宅の青いトタン屋根だった。壁はチベット独特の装飾で飾られているが、トタン屋根の住宅はここで初めて目にした。

まだ暗いうちに起き、被写体を物色しているとモルゲンロートに輝くピラピッド峰が現れたので、急ぎ皆を起こしに行く。

揚げパンみたいなものと豆乳の朝食後、今日はいよいよ悪名高い区間へと出発。

悪路の手前で、易貢蔵布に入る予定だったが、土砂崩れで道路は塞がれており、徒歩だと丸一日かかってしまうので諦め、いよいよ名物道路に突入する。狭い上にがたがたの道路は対向車はまだしも、軍用車の長蛇の列が入ると最悪だ。故障車で数時間停滞はあったものの樹間にギャラベリ(7,150米)が見えた途端、快やを叫びながら我先に車から飛び出しカメラにしがみついた。

出発前のスケジュールでは、途中の竜門から、グランドキャニオンよりすごいといわれるヤルン蔵布の大屈曲点まで2,000米下って又戻る数日間のトレッキングが予定されていたが、皆すでに相当疲れていたの次回に譲り、色齊拉峠(4,515米)へとペタルは踏み続けられる。峠では、日本隊が初登攀した東チベット最高峰南迦巴瓦峰(ナムチェバルワ7,7782米)との対面に期待大だったが意地悪なガスがベールに包み邪魔をしてくれる。それでも何とかそのスケールを感じさせるような写真にはありつけた。帰路にまた期待しようと、舗装道路を快適に下り、ボン教の本山が近くにある林芝を飛ばし八一に宿を求めた。この八一と、昌都そして後で通る茫康は不法入域外国人の取締りが特に厳

湖上には念青唐古拉山脈の一端の6,000米級ピラミッド型の高峰が影を落とし、また反対側には見るのも恐ろしい面構えの岩峰(昨年行った仙乃日より凄みがある)が立ちほだかり湖の景観に彩りを添えている。湖の中には小島があり、ここには14世紀に建立されたニンマ派の由緒あるお寺があると聞いていたが、小さな掘り立て小屋みたいな建物の上にそれとわかるささやかな仏塔が立っているだけのたまたまだった。

ここで往路のスケジュールは終わり、再び川蔵公路に沿って東進するが、今度こそは往路で期待を裏切られた南迦巴瓦峰が見たいと真っ暗な八一を朝食もなしに出発。峠では、ちょうど日の出時間となり、三脚を構えて待機したが、あーあ、今度はまったく逆光で山陰しかファインダーに入っていないではないか。峠から100米登るとギャラベリも見えるのだが、軍の立ち入り禁止の標識に拒まれる。

先日の悪路では、今度は軍用車が谷に落ちそうになって道路をブロック、また数時間の待機を余儀なくされる。軍用車の連中は退屈しのぎにかわるがわる我々のところにきて話しかけてくる。しかし鳥里さんは事故現場を見にいって不在。私を除く二人は中国語がからしき駄目なので、結局私がたどたどしい通訳の役目をおおせつかる羽目になった。お陰で苦手なヒアリングが多少ましになったのではないかと一人合点する。

波蜜と然鳥との間では、川蔵公路の両側にいくつもの高



峰と氷河があり、予定外ではあったが、その1つである拉古氷河と背中合わせの米推氷河に入ることになった。しかし、前の悪路で懲りた運転手は梃子でも動こうとしない。

波蜜で鳥里さんが探してくれたチベット人運転の年代物のジープに乗り換え誰もいない氷河に見参。6,000数百米の頂上はガスっていたがこれもなかなかのもの。

往路を邦達まで戻り、ここから茶古道で知られる雲南路に入る。左貢を過ぎ、5,008米の東達山峠では、たいした山は見えず、次の峠を越えるとぐんぐん高度を下げ、メコンの上流を渡る。最後の峠からは今日最高の屏風のような岩山が周りを圧倒して立っている。あれが大米勇(6,324米)か?。ここを下りると、建設工事ラッシュの茫康に入る。チベット人の露天商が多く、ひやかしながら、小ショッピングを楽しむ。

今日は山賊の出没で有名な区間を通過するが日中なので安心して出発。最初の峠拉鳥山(4,060米)では、何も見えなかったが、鳥里さんが峠の向こう側が見えるところまで上ると奇声を上げた。さてはと皆急いで駆けつけると、ウウ・・・。大米勇(6,324米)と動日嘎波が、競って雲間にその威容を誇っているではないか。しかし、下からこれらにアプローチするには、メコン流域の谷が深く相当苦労しそうだ。

カトリック教会のある塩井を過ぎると、後半のヒーロー、何度も挑戦者を退けている梅里雪山(6,740米)へと心のはやり、砂利道の低速にいらいらするが、対岸に見えるトレールを修復しているチベット人の姿を目で追いながら気を紛らす。

梅里雪山の永明氷河への分岐点では、夕暮れ前に主峰を見たいのでそのまま、飛来寺までとばし、日暮れ前ぎりぎり主峰に対面できた。今日は私の誕生日、主峰を眺めながら、祝杯も悪くないとチベット人の客棧(簡易宿)に宿をとる。客棧の二階では期待通りの月明かりの景観を肴に夜半

まで雲南製の白酒に酔いしれる。記憶では、3人で3本飲んだと思っていたのに、翌朝5本飲んだよといわれ、我ながらあきれかえる。愚行をしたものだ。しかし現金なもので、飲みすぎで重い頭は雪山のメルゲンルートですっかり目覚めさせられる。私の人生で、こんな素晴らしい贈り物をもらった誕生日はない。ああ、生きていてよかった。

後ろ髪を引かれる思いで梅里雪山を後にすると、今度はこの旅で雪山のフィナーレ白茫(馬)雪山が雲を払いのけて待っていてくれた。立派な梅里雪山の陰ながら、その存在を主張している白茫雪山には特別な感情の高まりを覚えた。

名物の金沙川の大屈曲点や得栄への分岐点を過ぎ、どんどん高度を下げると湿地帯を前に、空港の滑走路も見える高原に出、道は一気に香格里拉へと一ヶ月にも及ぶ、この雪山の旅の幕が引かれてゆく。

松本杏花さんの俳句

わりりいのおたより会員・松本杏花さんが昨年^{きょうか}末、中国で俳句集「拈華微笑(ニエンホアウェイシャオ)」(譯林出版社 中国語訳：葉宗敏、王大鈞)を出版されました。ここ数年に作られた俳句200首が収められているとのことですが、中国大好きな杏花さんの句には、中国で取材した作品がたくさんあります。

一方、今年2月28日付けの読売新聞夕刊によれば、この3月、北京で「漢俳学会」が設立されるとのことです。「漢俳」とは5・7・5の17文字の漢字で作る詩のことで、漢俳の流行は北京・上海に留まらず全国に波及しているそうで、湖南省長沙市では漢俳専門の機関紙の発行も見るといったと報道されています。

「拈華微笑」では、杏花さんの句が、17文字の漢俳に翻訳されており、中国文化の新しい詩の形を知るいい機会になります。わりりい紙上で一句ずつ紹介し、杏花さんの句と同時に漢俳も一緒に味わってみたいと思います。中国の方と中国語を勉強されているわりりいの読者の方のために、中文の解説を加えます。お楽しみください。(田井)

窯洞はすべて並列春陽浴ぶ

注：窯洞は中国山西省、陝西省などの黄土高原地帯に見られる横穴式住居。南向き丘陵断面に作られていることが多い。

ホスピスには4人の子供たちが女性たちと共に暮らしていました。一歳の男の子、9歳と5歳の兄弟、4歳の女の子です。どの子供もホスピスの女性たちとは親子・血縁関係はありませんでした。4人とも、両親はエイズによって死亡し、だれも面倒をみる人がおらず、マイティ・ネパールにつれてこられた子供たちです。どの子供たちも母子感染によってHIV患者となっていますが、幸いなことに、まだエイズは発症しておらず、ここで暮らすようになって半年ほどですが、全員が元気です。

ホスピスを訪問した3日間、私たちは一緒に、遊んだり、ダンスをしたり、食事をしたり、様々に楽しみました。一歳の男の子は人見知りをして、世話をしてくれる人の腕にほとんど抱かれていましたが、二人の兄弟は子供らしいはにかみと茶目っ気を見せてくれ、私たちの腕にすが



ホスピスの子どもたちとシータ (右端)

り付いてきたり、背中にもたれかかったりと親愛の情をしめしてくれました。

ただ一人の女の子・シータ(4歳)は、ふっくらとした頬っぺたと大きな目、笑うと大きく広がる口、小柄な全身から発するエネルギーのようなものが、初めて彼女を見た瞬間に、まるで真夏の日差しの中の向日葵のような印象を私に与えました。しかしシータは、私たちにあれこれと遊びをせがみながらも、甘えや親しみの感情を見せることはほとんどありません。自分から私たちのほうへ近づくことはあっても、私たちが近づくとくるっと背中を見せて無視をし、それまでの人の心まで明るくさせる花のような笑顔から一転して、取り付く島のない、あまりの態度の変化に戸惑うことがありました。

私たちツアーのメンバーとホスピスの女性たちの数人が中庭で賑やかにダンスをはじめたときの事です。踊りに加わらなかったホスピスの女性たちは立ち並んで、手拍子をとっています。少し離れたところに一人であったシータは小走りにやってきて、その列の中に加わ

ろうとしました。しかし、隙間を空けてもらえなかったので、急いで列の端に移り、隣に立っている女性の顔をチラッと見上げてから、自分も手拍子を打ち、楽しげに振る舞い始めました。その姿は幼い子供というよりは、仲間はずれになるまいとして一生懸命に同じようにしようと努めている、姿の小さな大人のように見えました。やがてダンスが終わり、手拍子もやむと、シータはさっと列から離れてまた一人になり、笑顔が消え、眉間に皺を寄せた硬い表情であらぬ方向に目をやっ

ていました。

ホスピスの人たちの話しでは、シータはとても利発な上に負けず嫌いで、ホスピスの子供たちの中では、年上の男の子がいるにもかかわらず常に彼女が主導権を握っているのだそうです。時には大人たちの関心を自分へ向けさせようといういろいろと試すこともあるのだそうです。見ず知

らずの他人がシータに同情を寄せたとしても、そんな甘っちょろい感傷はすぐに見透かしてガンと跳ねつける、分厚い鎧をまとった戦士です。

そんなシータですが、あるとき私がホスピスの庭を歩いていて、ふと隅の夕チアオイの繁みを見ると、その陰にシータがちょこんと座り、穏やかな表情で何かつぶやきながら小石をいくつも前にならべて遊んでいました。まるで小石を家族か何かに見立てて、話しかけながら遊んでいるように見えました。木陰や部屋の隅は子供にとって、誰にも邪魔をされず、自分だけの世界に浸れる大切な秘密の隠れ家です。シータにもこのような場所があるということを知って、彼女の中にある精神の強靭さを感じ、深い感動を覚え、いくらか安心もしました。

しかし、どの子供もシータのように強い精神力があるわけではなく、またシータもこの先状況次第でどのように変わるか判りません。何といっても絶対的な愛情や信頼を持って子供に寄り添う大人がいないということは子供の健全な成長に大きな影響を与えるでしょ

希望の先駆けプロジェクト(IHP)へのご支援のお願い

う。児童の発達心理学者の説によると、保護施設で育つ子供たちは病気になりやすい傾向があるそうです。絶えず精神的な不安を抱えているとストレスから自律神経や免疫力が弱まり、容易に病気になり、死亡率が高まるそうです。母子感染でエイズウイルスを移された子供たちは平均寿命が10年といわれているようですが、保護施設で暮らすシータたちの場合はさらに大きなハンディを負わされているともいえます。

今ネパールでは、HIVの感染者が恐ろしい勢いで増えているそうです。それとともに、いわゆるエイズ孤児と呼ばれる子供たちがマイティ・ネパールに保護をされる件数がどんどん増えています。家庭の外でHIVに感染した夫から妻が感染し、妻は罹患を知らずに妊娠・出産、そして子供も感染してしまうというのが大半のケースです。多くは子供がまだ幼いうちに両親ともに死んでしまい、HIVやエイズに対する偏見や経済的な理由から、残された幼い子供を引き取る身内もないのが現実です。

マイティ・ネパールはもともと人身売買をされた女性の救出と保護を目的に作られたNGOですが、保護をした女性たちの多くがHIVに感染していたことから、小さい規模ながら医療施設を設け、エイズ発症を押える抗ウイルス薬を投与するなどの医療行為をおこなっています。ネパール国内にいくつもあるNGOの中では比較的規模が大きく、このような活動に早くから取り組み、ネパール政府からも実績が認められているために、保護の要請は増加の一途をたどるばかりです。しかしいまやもうマイティ・ネパールでの保護の限界を迎つつあり、新たな施設、さらなる経済支援の必要性が叫ばれています。ネパール政府も遅まきながら国民にHIVやエイズについての知識を広め、予防を呼びかける取り組みを始めましたが、世界でも最貧国の一つという経済的な問題、風俗習慣の問題、識字率の低さなど大きな障壁が前に立ちはだかり、状態の改善さえもその糸口が見つからないようです。

ツアー参加後、一年がたちました。その間、ホスピスで出会ったカビータという女性が性器に出来た腫瘍とエイズによって26歳の短い生涯を終えました。控えめで、いつも静かな微笑で、私に親しみを寄せてくれた人でした。人によって無理やりに奪われた希望や喜び、時間、家族。保護されたあとでも奪われたものは取り戻せず、常に病に苦しみ、死への恐怖を感じながら生きている女性達やこの世に生まれ出たときからあまりにも短い寿命しかあたえられない子供達。この人たちと出会ったことで、こんな人生を送らざるを得ない人々をこれ以上増やしてはいけないという思いを一層強くしたスタディツアーでした。

ラリグラス・ジャパンはマイティ・ネパール、国際支援団体、個人支援者による共同事業として、マイティ・ネパールが保護するすべてのHIV/AIDS患者に医療検査、抗レトロウイルス薬投与、健康管理、精神的・心理的ケアなどの医療を提供する活動に参加をしています。

抗レトロウイルス薬は投与を始めると終生服用を続けなくてはなりません。また耐性が出来やすく、副作用も多く出るために、服用後の定期検査を欠かすことが出来ません。それでも服用後のHIVウイルスの減少や様々な数値のレベルの改善がみられ、患者にとっては未来への希望をもって生きることができるようになりました。

しかし、その費用が高額なために、投薬の開始はそのウイルスの数が先進国から比べるとはるかに危険度が増してからになるのが現状です。

すこしでも多くの女性や子供の患者達が未来への希望が見出せるよう、皆様のご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

お振込先は、下記へおねがいします。

郵便振替(通信欄にIHPとお書きください)

●口座番号 00100-5-713661

●加入者名 ラリグラスジャパン

銀行振込(お名前の後にIHPといってください)

●東京三菱銀行新宿中央支店

●口座番号：普通預金 4850061

●振込先名義：ラリグラスジャパン

会計 吉田久美子

ラリグラス・ジャパンのホームアドレス

<http://www.laligurans.org/>

 **出会い!!**

シンガポールを出国した船はマラッカ海峡を通りインド洋に入り、明日はコーチンに入港する。スリランカ沖を通過するときには12月にこの周辺を襲った地震の犠牲者の冥福を祈り黙祷した。この海域は海が荒れることが多いと聞くが今のところ波も穏やかだ。この一週間は船酔い止め薬も忘れていた。船酔いといえば、初日の横浜から神戸までは海が大荒れで大半の乗船客が船酔いに苦しみ、その中の一人は105日間の旅に耐えられないと神戸で下船したという。船内のエレベーターも運転を中止するほどだったからかなりの揺れだった。24時間効くという酔い止め薬を早めに飲んで寝てしまった私はラッキーだったといえる。

上海を過ぎたところから風邪を引いた人がかなり出てきて、マスクをしている人も見かけるし、診療所の前には診察を待つ人の列が出来ている。手洗いとうがいと十分な睡眠をと船内新聞にドクターが書いていた。それにしても古い船だからか、船内は場所によって温度の差が大きく、各キャビンごとに温度調節は出来ないからいつも上着を持って歩き、脱いだり着たりしている。寒暖の差も風邪の原因のひとつかもしれない。

インドの次の寄港地、ケニアがマラリアの汚染地域に指定されたので予防薬を飲むように勧められた。通常は週一回ケニア入国2週間前から、出国後4週間飲むのだそうだ。私の場合、心臓の薬を服用しているので、ドクター面接で入国2日前から32週間毎日飲む別の薬を処方された。また、インド入港に際して全員4日分の体温を記録し、検疫所に報告することになったからと、4日前からピースボートセンターに出向き、検温し、体温測定シートに記入して提出している。海から入国するときには空港とは違うことがいろいろあるみたいだ。

この船旅に私は一人で参加しているが、毎日実にさまざまな人との出会いがある。廊下を歩いたり、デッキを散歩していてすれ違う人は誰とでも挨拶をする。朝、昼、晩の3回の食事(午後のティータイムを入れると4回)は、毎回、ほとんど新しい人の隣に座ることになる。どこから乗船したか?きょうはどのイベントに参加するか(したか)?日の出を見たか?イルカを見たよ。南十字星が左舷に見えるよ、等等話が弾む。そして、次の講座と一緒に参加したり、その参加した講座で又知り合いが出来る。デッキに出て夕日を眺めたり、夜、居酒屋“波へい”でビールを飲んだりする仲間も出来た。

毎日、さまざまな企画が開催されているが、大きく分

けて3種類ある。ひとつはピースボート企画で有料の地球大学講座、有料無料の英語講座、スペイン語講座、水先案内人の講座など、2番目はジャパングレイス(旅行会社)企画の寄港地説明会、オプションツアー説明会など、3番目は(これが一番多いのだが)個々の乗船客の自主企画。特技を持つ人が何を企画してもよいので場所の調整が大変なようだ。ラジオ体操、太極拳、絵手紙、コーラスは私が参加しているものだが、他にも、ヨガ、フラダンス、ソシアルダンス、手芸、折り紙、尺八、謡曲、シャンソン、八丈太鼓、ひきしめ体操、チア・リーディング、バスケットボール、卓球、手品、麻雀、語学(英語、スペイン語、ハングル語、インドネシア語、スワヒリ語)等等。

この他にも新しい自主企画が次々と生まれている。私は午前中は主に自主企画に、午後はピースボートは水先案内人企画に参加している。さまざまな企画を作る側(手伝いを含めて)に参加すればさらに出会いの場は広がるだろうが、今のところ私にはそこまでの元気はない。先日シンガポールで下船した水先案内人の本田さん(91歳)が「ちょっとキザですが、フランスの詩人が“人生とは出会いから別れまでの時間を糸で繋いで首飾りにしたもの”と言っています」という言葉を残していった。なるほどなあと思えてきた。(2005年2月20日)

 **コーチンからモンバサまで**

コーチンを出た船はインド洋は西南西へケニアに向けて進んでいる。昨日午前4時ごろ赤道を通過したときには汽笛の合図があったということだが、熟睡していて知らなかった。

コーチンでは、オプションツアーに入らず自由行動をとった。ピースボートの停泊港はエルナクラム地区のある新市街とフォートコーチンや、マッタンチェリー地区のある旧市街の間にはさまれたウィリングドン島という人口の島にある。島とふたつの市街は橋がかけられているがタクシーやオートリキシャでこの橋を渡るよりもボートを利用するのが経済的だ。2年前、ここを訪れたときは人と任せだったが今回は自分の足で2日間歩き回った。ジェッティと呼ばれるフェリーやボートの船着場がいくつもある。1回の料金が2ルピー(約50円)くらいなので、何回もボートを乗り継ぎ、前回行かなかったユダヤ人教会やヴァイピン島にも足を伸ばした。文字が読めないからどこに連れて行かれるか不安もあったがちょっぴりスリリングで楽しかった。

コーチンを出港した翌々に洋上運動会があった。そ

の何日か前から若者たちが中心になった実行委員会が出来た。ひとりひとりの和みの「和」が「輪」を作ったとき、運動会は必ず「沸」きあがるはずと「つながる家族の和・輪・沸」というスローガンで、誕生月によって4つに分けたチームが作られた。優勝チームには居酒屋“波へい”で‘1時間、飲み放題’の豪華プレゼントもあるというものだった。各チームの参加人数が得点に大きく影響するので、私も白組のひとりとして人数を数える開会式と応援合戦の時には参加したが、残念ながら優勝はできなかった。日焼け対策をして水分補給をしても炎天下では1時間もしないうちにフラフラになりキャビンに戻って休んでしまった。

船会社側の企画したブリッジツアー（操舵室見学会）に参加した。操舵室は普段歩いている8階デッキからcrew onlyと書かれた階段を上ったところにある。いつも下から見上げていた救命ボートが眼の高さにある。室内は他では見ることのできない計器の数々。舵輪2コは50年前建造当時のままのものだそうだ。船にもブラックボックスというのがあるのをはじめて知った。室内にはエアコンがないため非常に暑い。ここは常時2名のペアで4時間交代で6名が仕事をしているそうだ。30分余りの楽しい見学会だった。

シンガポールから高遠菜穂子さんとフリージャーナリストの綿井健陽さんが乗船した。イラク問題やNHKの番組改変問題についての講座が何回かあった。こんな機会でないで見たり聞いたりできない映像や話だった。あの“ETV2001”も見ることができた。今ではあのビデオは封印されてしまってNHKライブラリーに行っても見ることができないそうだ。

この船には10数カ国の人達が乗っている。その人達も当然いろいろな講座に参加している。ピースポートにはCC（コミュニケーションコーディネーター）というボランティアがいる。CCとは外国語と日本語の掛け橋となる通訳者のことで水先案内人企画やオプションツアーの際に英語、日本語、スペイン語のコミュニケーションがスムーズに行くよう調整してくれる人たちだ。

今回、この船には14人のCCが乗っている。CCは通常2人～3人でチームをつくり、事前の打ち合わせを何時間かやって講座に臨むそうだ。専門用語などはその際にきちんと調べておくと、質疑応答の時間になると予想もしない言葉が出てくるので戸惑うことがあるという。10分交代で“通訳”しているが自分が担当する10分間はもちろん、その講座が終わるまでは緊張の連続だと、以前CCをやったことのある若い女性が話していた。PA（パブリックアドレス）というボランティアもいる。音響や照明を担当している人たちで、運動会で掛ける音楽を、ボタ

ンを押しワーツと盛り上がる瞬間を想像しながら、朝までかかって探したなんて話も聞いた。

いろいろな人たちの力で105日間のこの旅が続けられるのだということが実感できる。

明日の朝、ケニアのモンバサに入港する。日本との時差は6時間。きょうから飲み始めたマラリア予防薬の副作用なのか体調が悪い。この薬を32日間飲み続けるとなるとちょっと不安になってくる。（2005年2月26日）

あさおサークル祭り 2005

— 今年も楽しい催しがいっぱい! —

■ 5月21日(土) 視聴覚室

●中国語で歌ってみよう! 10:30～12:00

明るく楽しい日本の歌「いつでも夢を」

(作詞: 佐伯孝夫、作曲: 吉田正)

指導: 中国人歌手・趙鳳英さん 参加無料

●中国民族楽器探検 「華麗なる音色、中国琴!」

13:30～14:30

演奏とお話: 何媛媛さん 参加費: 無料

日本の琴と中国の琴、形は一見同じようですが、演奏の仕方も音色もまるで違います。新年会で演奏くださった何さんが、中国のお琴の秘密をいろいろ教えてくださいます。

■ 5月22日(日) 視聴覚視室

●馬頭琴合奏と語りによる「スーホの白い馬」

13:30～14:00

馬頭琴合奏: 万馬東京馬頭琴教室のみなさん

語り: 桑原紀子さん

昨年、上演し大きな感動を呼びました。馬頭琴合奏をバックの語りは他では聞けません。

●馬頭琴体験「馬頭琴にさわってみよう! 音を出してみよう!!」

14:00～15:00

指導: 万馬東京馬頭琴教室のみなさん

■ 5月22日(日) 大ホール

●馬頭琴大合奏

10:30～11:00

演奏: 万馬東京馬頭琴教室の皆さん11名

演奏曲目:

1. 窓の蠅
2. ノンジャー
3. ガダ・メーリン
4. 運命
5. ウジムチン・ノットギン・バラ
6. 昇る太陽

※変更することもあります。

3月2日から14日までラオス北東部シェンクワン県ノンヘート郡のモン族の村に滞在した。訪問したのは、前回紙面で紹介した安井清子さん(山の子ども文庫基金)と情報文化省文化研究所のモン族のソムトンさんと私。日本から学生の友岡清秀君と森田大輔君も絵本を携え、急遽加わってくれた。

今回の目的は、この秋の子ども図書館(遊び小屋のような)の建設準備と調査である。それは大きく分けて「村の中に子どもの遊ぶ、形のある場所を作ること」「材料・生活技術・風習など村の地域資源を探ること」「村の人々と図書館のイメージ作りと人間関係作りをすること」3つである。

▶ 雨期の前の村の様子

村に到着した翌朝、村人が畑作業に出払ってしまう前に(遠い畑へは山道を1時間歩く)、村の顔役たちに今回の訪問の目的について説明し、協力をお願いした。

農閑期ではあったが、われわれの予想とは異なり村人は毎日忙しいので、村人を集め村の現在の問題や今後のあり方、今度の図書館について議論を重ねると言うことは難しかった。

例えば、住宅の屋根の茅を修繕、新築、農具の修理などの鍛冶仕事など雨期に備えている。ノンヘート郡は他の地域に比べて、焼畑の準備を始める時期が早く、既に多くの畑が焼かれ山はまだ微かにすすけた匂いがする。とうもろこしの種はまき終わり、これから雨が降り出せば陸稲の収穫をまくと言う。

大人は野良仕事で、中学生は町に勉強で、出払っている。5歳の小さな子ども幼児の面倒や水汲み、牛追いを立派にやっている。日中の集落には、妙なくらいにしっかりした顔つきの子どもたちしか見えず、なにか「子どもの国」に迷い込んだような気がする。ちなみに後日訪れた隣の県のモン族の村は、まるで正月のような騒ぎで、1日に5、6度も食事に呼ばれた。村の事情は、同じモンでも地域によって大きくことなるようだ。

▶ 木に関して

村から歩いて行ける距離には、建築物に使える材種・大きさの物はもうこれまでに切ってしまうという。移動を繰り返してきたモンの人々には、植林をして山を守るという習慣はなく、自然の回復力も追いつけなくなっている。それは現在の焼畑のあり方についてもいえることである。それらは、ラオス全土にも共通する複雑で、大きな問題なのでまた機会をあらためて話が出来ればよいと思う。

▶ 場所作り

今度の図書館の敷地に、簡単に手早く空間を作るために、竹を使ってドームを作った。作業は主に、日本からの3人

が行い、4日間程度で作った。

先に安井さんは、子どもたちと地面に敷いた合板の上に絵本を広げて、お話を讀んだり、絵を書いたりして、遊ぶことから始めており、その場所にそのままドームをかけた。通りかかる人が、「これが図書館かい?」「日本の家は、竹でできてんのかい?」と言ったり、手伝ってくれる人もいれば、怪訝な様子の人もある。作業にあたっては、長老のサイガウ爺さんがずっとそばで見守ってくれて、他の人も我々のへっぴり腰を見ては指導してくれた。

このドームの壁の内と外に、安井さんがこれまで撮ったこの村の写真と子どもの描いた絵を早速展示すると、村にギャラリーが出来たようだった。畑仕事の行き帰りの人もよく立ち寄るようになった。この竹のドームに絵本と絵の道具を持参すると、たくさんの子どもたちが時間を見つけては、集まって来るようにもなった。

形はともあれ、竹で囲われ、茅の日除けで被われ、ドームが出来たこともイメージとしてその一助になったかと思う。何かの期待を持って集まってくると言うことが、子どもたちにあったのではないか。少年が牛飼いの帰りに通りかかり、牛を家に帰した後、走ってこの場に駆けつける姿など、とてもほほえましく感じた。

ここにすれば、本がある、人がいる、遊べる場所がある…。

▶ 図書館の始動に向けてこれからの課題

村の中に場所を定め(図書館建設地)、具体的な形のある物を村の材料と技術を使って作ることで、予想は出来ないが村のことをより多く知りえるような気がした。良く話し合うことが出来なかったこともあり、今回の意図を村の人にはっきりと伝えるのは難しい面もあったが、収穫の多い訪問になった。

日本の左官の技術を用い工夫次第では、住宅には利用していない村の石灰石(焼成して生石灰として水に溶け壁に塗ることが出来る)や粘土が使えることもわかった。日本の学生も茅の屋根材を編んだり、竹を多用途に加工したりと、日本では得がたい経験に触れる機会になったようである。

文庫の活動としては、日本に帰って今回の調査をまとめそれを元にこの秋の建設に備え、図書館のあり方(建物・運営)について考えていくことと同時に、日本の絵本にラオス語をつけたり、これまでモンの人々が作り上げてきた刺繍絵本(布・糸)を複製保存(デジタルデータ化・写真撮影)し、複製絵本(プリントアウト・コピー)を製本する作業がある。できれば、秋に図書館にその絵本が持って行けることになる。



図書館のモデルを作って打ち合わせる



図書館予定地で読み聞かせをする安井清子さん

刺繍を作って、私たちが
待っていてくれたモンの
チイおばあちゃん



図書館予定地に、竹を使ってドームを作る。



ドームの中で写真や絵を展示

針と糸の語りべ ラオス・山の民モンの子どもたちの刺繍絵本展

2005年5月23日(月)～29日(日) 於:ば・る・るプラザ町田6Fギャラリー

主催:ラオス 山の子ども文庫基金 共催:日中文化交流市民サークル‘わんりい’

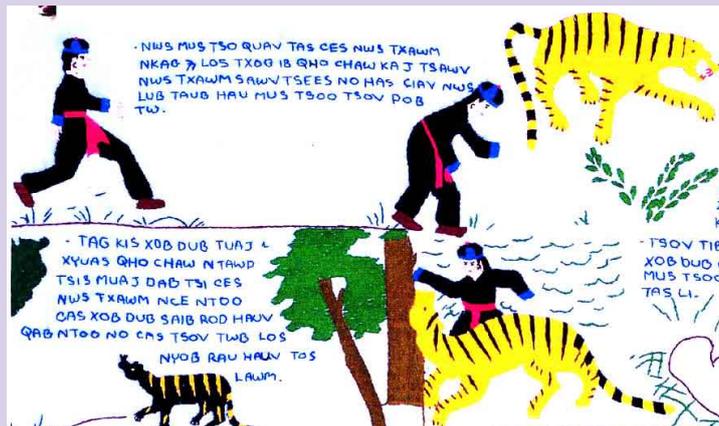
ラオスの山の民、モン族はもともと文字を持っていません。

お話は語りべによって口から口へと伝えられてきました。そして、刺繍は、母から娘へ、手から手へ伝えられています。

今から、10年以上前、インドシナ戦争の影響で、山の暮らしを追われ、難民キャンプで暮らしていた子どもたちが、その刺繍で絵本を作りました。私たちにもお馴染みの絵本、モンの民話、そして、日々の暮らしを綴ったものなど、難民キャンプで子どもたちは、布の上に針と糸で、色鮮やかな世界を広げて行ったのです。



軒下で刺繍をするモンの女性たち



モンの子どもの手づくりによる刺繍絵本の一部

今年の三月十一日は、旧暦の二月二日であり、「春龍節」とも言われます。

伝説によりますと、女性皇帝の武則天が、唐を廃し、周を立て、自ら帝を称したことを、玉皇大帝(天地の間に一番権力の大きい神様)は大いに怒り、龍王に三年間に雨を降らせないようにと命じたそうです。龍王は人間の苦しいありさまを見かね、こっそり大雨を降らせました。その為玉皇大帝は竜王を天宮から追い出し、大山の底に押さえ鎮めました。お百姓達は龍王の恩にお返しをしたいと思い、毎日毎日お祈りをし続けました。玉皇大帝は大層感動され、二月二日に龍王を釈放し、その後、世間には「二月二日、龍台頭」という話が言い伝えられるようになりました。

龍は中国人の心にとって大変重要な位置にあります。吉祥の象徴であり、風を和らげ、降雨を司ると思われているのです。

二月になると、雨が多くなり、万物が再び蘇ります。農作業が始まる季節でもありますので、人々は天候順調、五穀豊穡であるようにと龍に希望を寄せるのです。

二月二日、各地各様の様々なイベントが開催されます。花神を祭る所もあれば、「祭社」(土地神を祭る)を行う所もあり、「踏青」(春の日に、郊外を散歩すること)する人達がいれば、獅子舞を踊る人達もいます。

民間行事は、いつも食べ物と切り離せません。古くから北京ではこの日の特別な食べ物は「春餅」です。薄い焼き餅に味噌をつけ、春雨、もやし、肉などを一緒に炒めたおかずを巻いて食べます。

また、面白いことに、北方の人々はこの日必ず理容院へ行きお正月前から伸ばして来た髪を剃ってしまいます。気持ちを整え、すっきりした気分で良い一年を迎えたいという心の中の望みを言わなくても、さっぱりした髪の色を見ると良く分かるのです。

何 媛 媛：本名、何 向 真。

山西省出身。来日して以来、地域の国際交流活動に力を入れ、古箏と中国語を教えています。町田市能ヶ谷町在住。

☎ 042-735-3984

Email:kakoushinjp@yahoo.co.jp

Website:http://www.cn-jp.com

◆上記サイトでは中国琴の音色を楽しめます。

中国を読む②

「対談 中国を考える」 司馬遼太郎/陳舜臣 文春文庫



中国では反国家分裂法が制定され、韓国とは竹島(独島か?)で揉め、北朝鮮からは公開処刑の映像が流れ、なんだかかまびすしい。北朝鮮の問題にしる、イラク戦争にしる、あの人が生きていたら、なんて言うだろうと考えたときに、司馬遼太郎は多くの方が思い浮かべるんじゃないだろうか。

「対談 中国を考える」は、30年ほど前に司馬遼太郎氏と陳舜臣氏が中国を肴にあれこれと語ったもの。1976年に周恩来、毛沢東が死去、四人組が逮捕されたことを考えると、対談が行われた時期はひとつの転換期といえる。移り変わりの激しい中国のこと、もう古いことばかりかと思いきや、そうでもない。それは、両氏が歴史という大きなうねり

のなかで、中国ひいては日本を語っているから。本書を読んで感じるのが、中国と日本が近い存在だということ。両国は兄弟のように影響しあい、学びあい、喧嘩をし、しかし別人格として育っていく。歴史的に見れば、日本はずっと中国の弟。しかし成人になってみれば、弟のほうが兄貴より偏差値の高い大学を卒業、いい給与の貰える企業に入社していた、という関係…なのかもしれない、今のところは。

司馬氏は日本には普遍性がないと言う。自分たちの特殊性に閉じこもって、満足しているようじゃ、どんどん軟弱になっていってしまうよ、と忠告する。じゃあ、普遍性を身につけるにはどうすればいい? 司馬氏は普遍的世界で「寝たり起きたりしている中国人を見てたら、それでいい」とあっさり。普遍性なんて「寝て働いて食うこと」。つまりはシンプルに「生きてる」ということなんだろう。「武士は食わねど高楊枝」みたいな妙な理論に走りすぎると、道を間違ってしまう。結局、私達は「日本国民」以上に、日本に住む「住民」なんであって、よりよく暮すために、シンプルに必要なことを考えてみたら、意外と簡単に答えは見つかるのかもしれない。

(真中智子)

【活動報告】**ワンタン交流会** 2月27日(日) 於：鶴川市民センター・第二会議室 参加14名

昨年末、和光大学で、日本人学生たちと留学生たちによって催された「アジアの茶店」が縁で中国瀋陽出身で和光大学文学部に留学中の、張美哪さん^{zhāng měi nā}にお願いし、ワンタンの作り方を指導いただいて皆で作りに一緒に頂きました。

瀋陽は中国部東北部に位地し、餃子など粉食文化の盛んなところ。指導いただいたワンタンは、「セロリと豚挽き肉のワンタン」「卵と韮(豚肉、海老も入る)」の二種類で、包み方も上海風と瀋陽風の二通り、地域によって違うのだそう。餡を入れて長方形に折り、それをくるりと丸めて看護婦帽型が上海風。

強力粉を捏ねて伸ばした大き目の皮は餡もしっかり入り、如何にも家庭料理といったボリュームのあるもので、日本で頂く、ひらひらと頼りなくスープの中で泳ぐワンタンとは違い、ずっしりとお腹にたまります。

和やかに交流しながら皮を伸ばし、餡を包み、山ほどのワンタンの出来上がりです。これまでわんりいの料理講座で学んだ中国各地のいろいろな料理もテーブルに並んで、弾む話で賑やかに、お腹がはちきれそうになるほど頂きました。張美哪さんにとって、このような催しは日本に来て初めてとのことで「わんりい」のおばさん達のパワーと明るさに感動です」とのことでした。



皮を捏ねて伸ばす。(右から2人目が張さん)



手の大きさと比較すると大きさが分かる。



ニコニコしながら張さんも満足顔(真ん中)

‘わんりい’のおたより会員になりませんか？

— 継続のお願いとお誘い —
入会金なし 年会費：1500円

‘わんりい’とは、どんな意味ですか？とよく聞かれます。‘わんりい’は万里の長城の“万里”を中国語読みにしていきます。民族の文化は万里に繋がるとの思いから命名されました。

「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知ることは、国や民族を超えた理解のきっかけになるのではないか」という趣旨で、市民レベルでの国際友好を目指して1992年より活動している市民ボランティアの会です。

会名に日中の冠がありますが、主として位の意味合いで、気楽にいろいろな国のかたがたと交流しており、これまで目的に添った講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を数多く開催してきました。おたより会員になりますと、会のすべての活動に参加でき、会報‘わんりい’(原則として、年10回発行)をお送りします。

活動の様子は、会報‘わんりい’や‘わんりい’のHPでご覧いただければと存じます。文化は国を超えてつながっています。多数の方々のご協力やご参加を頂いて幅広い活動で楽しみたいと仲間を募っています。

尚、事務処理上、会費納入月は毎年4月です。すでに会員の方には、手数料無料の振り替え用紙をお送りいたしますので、4月中に納入くださり、ご継続くださいますようお願いいたします。

おたより会員の年会費は、1500円で、会報‘わんりい’の郵送費と活動のサポート費に充てられます。問合せ:わんりい事務局(1Pに掲載)

◆‘わんりい’会報は、川崎市麻生市民館、川崎市多摩市民館、町田市民フォーラム4F国際協会、神奈川県国際交流協会、アクロス中国・新宿本支店で自由にお取り頂く事ができます。

多くのご支援、有難うございました！

～スマトラ沖地震復興支援～

「アジアの子どもたち」写真展と「絵画と工芸品のチャリティ販売」のご報告

この催しは、町田ボランティアセンターが主催するイベント「はじめの一步」の実行委員会より、町田周辺にて国際支援や国際友好活動を行っている団体がメンバーの「町田国際協力団体連絡会」への呼びかけがあり、町田国際交流センター協力部会との協力体制のもと実施されました。

準備期間が1ヵ月少々と短かく、PRの余地はまだまだありましたが、展示写真65点、チャリティ参加作品は42点にのぼりました。また、一日平均150人が来場し、メインイベント「はじめの一步」当日の21日は200名の来場者があり盛会でした。

今回の催しでは、自ら訪ねたスマトラ沖地震被害地の現地の様子をお話くださった和光大学の渋谷利雄先生、バンバン・ルディアント先生並びに中国琴を演奏くださった何向真さん、馬頭琴演奏のチ・ブルグッドさん、そして、絵画を寄贈くださった方々も、写真をわざわざ引き伸ばし出品くださった方々もすべて無償のまったくのボランティア精神にかなった、気持ちのよい協力による内容の濃い催しでした

義捐金総額は、チャリティの売り上げと会場募金箱他の合計で130,918円になり、予想を超える金額となりました

た。国際協力団体連絡会では、見える支援として、拠出金をインドネシアとスリランカを活動拠点とする3団体に贈る事になっています。

国際協力団体連絡会構成団体は長年独自にボランティア活動を続けておりますが、連絡会として発足後の初めての催しでもあり、意義ある活動ができたこと、メンバーの一員である「わんりい」としても、多くの方のご協力に感謝しつつ喜んでおります。



インドネシア、アチェ州の被害状況を語るバンバン先生

《'わんりい' 掲示板》



チャリティコンサート

サイ・イエングアン & 神田 将

—国際支援と地域社会福祉のために—

サイ・イエングアン(ソプラノ)

神田将(エレクトーン)

- 於：町田市民ホール
- 2005年4月20日(水)開演：18：30
- 参加費：4000円(全席自由)
- 主催：国際ソロプチミスト町田
- 申込 & 問合：Tel 042-734-7898 (藤田)

サイ・イエングアン(崔岩光)

1984年中国音楽学院終了、中国中央歌舞劇院ソリストとなる。1992年東京藝術大学学長、平山郁夫氏の招聘により来日。以来、数々のオペラ公演に出演し、高い評価を得ている。

ご予約を！ アフリカ・ケニアの健康料理

6月19日(日) 11：00～14：00

於：麻生市民館・料理室

参加費：2500円(会員：2300円)

講師：ガスパレイ・ミグィ・キルスさん(ケニア出身)

- ▶ 製作予定料理：ケニア風牛肉と野菜のシチュウ他、チャパティ、カチュンバリ(野菜のサラダ)、サモサ等

日中友好会館での催し

▶ その1 中国古書と文化展 (入場無料)

於：日中友好会館地下1F 大ホール
2005年4月7日(木)～4月9日(土)
10：00(初日14：00)～17：00(最終日15：00)
休館日なし

主催：中国全国古書整理出版計画指導グループ(財)日中友好会館

中国全国古書出版社联合会と関連古書出版社によるおよそ1000種類、2000冊以上の古書を展覧し、日中両国の古書に関連する学術交流と文化交流を目指す。

(問合せ下記)

▶ その2

現代中国画家楊力舟 & 王迎春の水墨世界

於：日中友好会館 美術館 (入場無料)
2005年4月15日(金)～5月12日(木)
10：00～17：00 休館日月曜日

主催：(財)日中友好会館
現代中国美術界を代表する画家・陽力舟 & 王迎春夫妻の中国画約40点を展示

問合せ：(財)日中友好会館 文化事業部

☎：03-3815-5085

中国旅行は、中国旅行専門店・アクロス中国へ 20年の実績と中国人スタッフと中国留学経験者があなたと一緒に創る中国の旅 ☎03-5352-0146